

「未来を拓く思考力・判断力・表現力」の育成

～「論理的思考モデル」を用いた言語活動の指導と評価を通して～

1 指定研究課題と研究内容

国立教育政策研究所
研究指定課題

(1) 指定研究課題

本校は、平成24・25年度の2年間、国立教育政策研究所の研究指定校として「思考力・判断力・表現力の育成」についての研究を行っている。指定研究課題は次の通りである。（下線部筆者）

【平成24～25年度 教育課程研究指定校事業 指定研究課題】

思考力・判断力・表現力の育成を目指し、学校全体としての目標設定とそれに向けて各教科等における取組の連携を図り、それらの成果を学校として評価するための実践研究

- 各教科、特別活動、総合的な学習の時間での目標、指導を踏まえつつ、学校全体で、特定の教科等に限らない A 社会生活全般で活動していく上での思考力・判断力・表現力を育成する際に、B どのような目標設定とするのか、そのために教科等間でどのような連携等が行えるのか、目標実現状況の評価をどのように行ったらよいか等を実践研究する。

課題に対する
本校の研究内容

(2) 研究内容

本校では、指定研究課題の下線部A、Bの部分を重視し、次のことについて研究する。

- ① 社会生活全般で活動していくためには、どのような思考力・判断力・表現力が必要か。
- ② ①の思考力・判断力・表現力の育成のために、学校全体としてどのような取組が有効か。

① これからの社会に必要な思考力・判断力・表現力

これまでの社会では、学校で教えられた、あるいは社会の中で常識となっている知識・技能を身に付け、それらを「再生」するだけでも生きていくことができた。しかし、価値観が多様化し、変化も大きいこれからの社会では、様々な問題に対して自分の考えを持って状況に応じて行動し、よりよい人生、よりよい社会を築いていく（未来を拓く）ことが必要である。

そのためには、学校教育の中で、生徒が既存の知識や技能や様々な情報をもとに思考して判断し、それらについて表現する力、すなわち「思考力・判断力・表現力」の質を高めることが必要である。本校では、未来を拓くために必要な質の高い思考力・判断力・表現力として、次のような「未来を拓く思考力・判断力・表現力」の育成を目指す。

本校の考える
「未来を拓く思考力・
判断力・表現力」

〈未来を拓く思考力・判断力・表現力〉

A 論理的な思考力・判断力・表現力

主張・根拠・理由付けの筋道を立てて、確かに思考して判断し、表現する力

B 多面的・総合的な思考力・判断力・表現力

複数の視点から考えたことをもとに、それらを総合して幅広く思考して判断し、表現する力

C 批判的な思考力・判断力・表現力

主張・根拠・理由付けやそれらの関連について、正誤・適否・確かさを検証しながら思考して判断し、表現する力

② 学校全体の取組

思考力・判断力・表現力を効果的・効率的に育成するためには、教科間の連携が必要である。しかし、教科担当制である中学校では、一人の担任が複数の教科の授業を行う小学校に比べて、教科間の連携がとりにくいという問題がある。本校では、「未来を拓く思考力・判断力・表現力」を育成するという共通の目標を設定し、教科間の連携の中身をそれぞれの教科の学習において教科共通で取り組むことと、教科の特性に応じ分担して取り組むことに分けて考えることで、学校全体の連携を図る。

まず、共通して行うのが「未来を拓く思考力・判断力・表現力」のベースとなる「論理的な思考力・判断力・表現力」についての共通理解とそれらを活かした実践である。「論理的」という言葉には様々な捉え方があるが、本校ではトールミンモデルや三角ロジックの主張・根拠・理由付けの3つの要素をもとに、「主張・根拠・理由付けの筋道が立っており、説得力があること」ととらえている。なお、主張・根拠・理由付けについては、それぞれを次のようにとらえて共通理解した。

「トールミンモデル」
: イギリスの分析哲学者
スティーブン・トール
ミン (Stephen Edels
ton Toulmin: 1922-2009)
が実社会の議論形態を
分析して提唱した論証
モデルのこと。

「三角ロジック」
: 「主張」「根拠(データ)」、
「理由付け(論拠)」の
3つが矛盾なく整合性
を保っている状態を3
角形で表したモデルの
こと。

全教科で共有する
主張・根拠・理由付け
のイメージ

主 張 …課題に対する自分なりの結論

根 拠 …その場にいる全員が納得できるような確かな情報

理由付け…根拠をもとにした解釈・説明、根拠から主張までのプロセス

◇主張・根拠・理由付け
を取り入れた授業研究
については、熊本大学
教育学部と学校園(附
属小, 附属中, 附属幼
稚園, 附属特別支援)
が連携して研究を行な
っている

これらを、それぞれの教科の授業を考える時や生徒を指導する時、生徒の表現を評価する時などに意識することで、生徒の思考・判断を視覚化・構造化し、思考力・判断力・表現力を育成するための指導と評価に生かすことができるのではないかと考えた。

次に、分担して取り組むのは教科の特性を活かした指導である。教科にはそれぞれ特性がある。例えば、論理的な思考力・判断力・表現力を育成するのに適した教科、多面的・総合的な思考力・判断力・表現力の育成に適した教科、他教科を中心に育成された論理的な思考力・判断力・表現力を活用することでその教科の目標をよりよく達成できる教科など、教科によってできることに違いがある。それぞれの教科の特性を活かして分担しながら取り組むことで、学校全体で効果的・効率的に「未来を拓く思考力・判断力・表現力」を育成することができるのではないかと考えた。

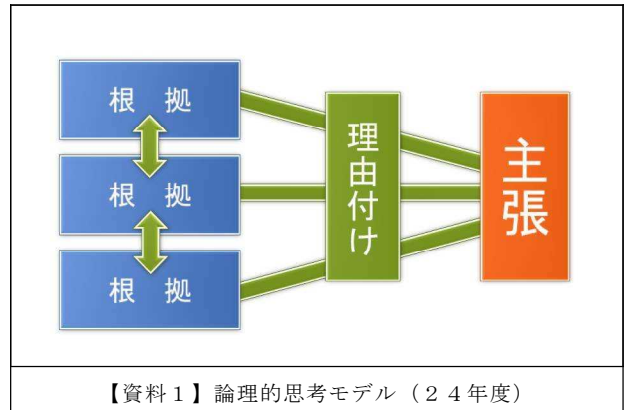
2 1年次の研究について

(1) 1年次の取組

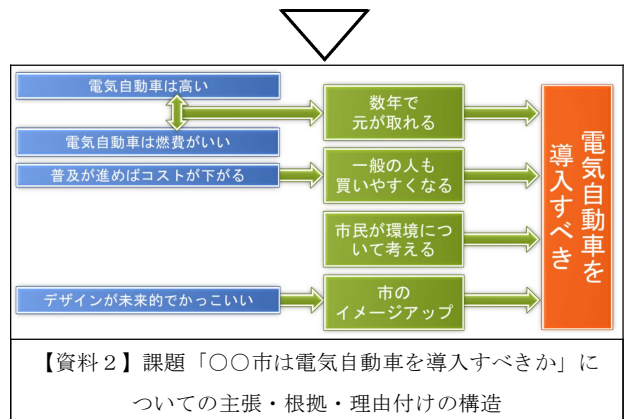
1年次は、「未来を拓く思考力・判断力・表現力」のうち、ベースとなる「論理的な思考力・判断力・表現力」の育成について、教科共通で取り組む内容を中心に研究を行った。

まず、論理的な思考・判断・表現を行う際に必要な主張・根拠・理由付けの構造を視覚化・構造化した「論理的思考モデル」(【資料1】)を作成し、イメージを共有した。

各教科の授業においては、論理的思考モデルをもとに、その授業で用いられる根拠、主張、理由付けなどの情報やそれらの構造を予測して指導と評価に生かすことで、論理的な思考力・判断力・表現力を育成するとともに、各教科の言語活動の充実を通じて学力を向上させることができると考え、実践を行った。



【資料1】 論理的思考モデル (24年度)



【資料2】 課題「〇〇市は電気自動車を導入すべきか」についての主張・根拠・理由付けの構造

「論理的思考モデル」
(24年度)

◇生徒の思考を事前に予測することで生徒の思考を狭めてしまう危険性について、いくつかのご指摘をいただいている。そのようなことがないように、柔軟性のある指導と評価を心がける必要がある。

(2) 1年次の成果と課題

1年次の成果と課題は、以下の通りである。

【成果】

- 教師が生徒の思考・判断の構造を意識して見取り、不足を補うための指導をすることができるようになった。
- 生徒の表現が簡明になり、お互いの意見を理解したり、交流したりすることができるようになった。
- 「知識の暗記」に留まらず、原理や仕組みについても理解できるようになった。

【課題】

- 「理由付け」の中身を具体化し、理由付けの質を見取ることができるようになる必要がある。
- 「理由付け」の質を高めるための指導方法を具体化する必要がある。
- 教科の特性をふまえた指導と評価や、学校全体で「未来を拓く思考力・判断力・表現力」の育成を図る際の教科又はグループにおける役割分担を明確にすることが必要である。

1年次の 成果と課題

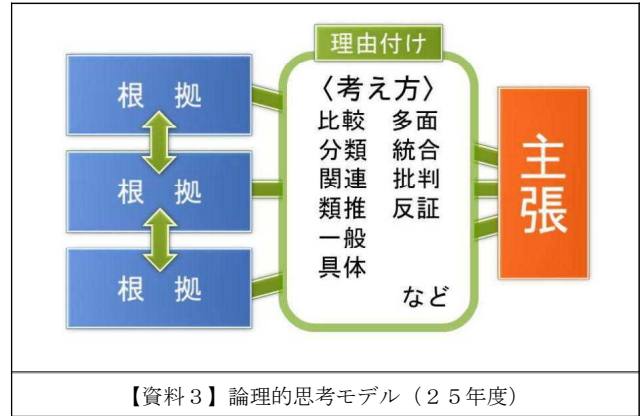
◇成果と課題は主に生徒アンケート、職員アンケートによる。

3 2年次の研究について

(1) 2年次の研究について

2年次は、「共通して取り組むこと」に加えて、「分担して取り組むこと」についても研究する。

まず、共通して取り組むのは、理由付けの充実である。既存の知識や課題に示された情報、調べた情報をどのように操作するのかを、比較、分類、関連付けなどの〈考え方〉という概念を用いて明らかにしていく。「論理的思考モデル（24年度）」に〈考え方〉を加えた「論理的思考モデル（25年度）」（【資料3】）を作成し、これらを指導と評価に生かしていく。



「論理的思考モデル」
（25年度）

次に、分担して取り組むのは、教科の特色を活かした指導と評価である。教科にはそれぞれ特性があり、違いがある。「だから、連携が難しい」と考えるのではなく、むしろその違いを生かしたい。その教科でできることを分担して行い、それらを関連付けながら取り組むことで、学校全体で「未来を拓く思考力・判断力・表現力」を育成することができると考えた。

2年次は、目指す授業のタイプに応じて次の3つのグループに分け、それぞれの教科の特色を活かした授業について研究した。

3つの
研究グループ

- A 考えを「深める」グループ（国語，数学，理科）
- B 考えを「広げる」グループ（国語，社会，技術・家庭，健康）
- C 考えを教科特有の表現に「活かす」グループ
（国語，英語，音楽，美術，保体）

(2) 研究の仮説

研究の仮説は以下の通りである。

2年次の
研究の仮説

- ①「論理的思考モデル」を用いた思考・表現活動を取り入れ、特に「理由付け」の部分に着目して、その質を向上させるための指導と評価を行うことで、言語活動が充実し、各教科の学習の目標をより効果的・効率的に達成できるだろう。
- ②各教科の特性に合わせて「論理的思考モデル」を用い、生徒それぞれの考えを深めたり、広げたり、教科特有の表現に活かしたりすることで、生徒の考え方の質を高めるとともに、「未来を拓く思考力・判断力・表現力」を育成することができよう。

2年次の取組

(2) 2年次の取組

【教科で共通して行うこと】

- ① 「論理的思考モデル」を用いた表現活動
- ② 思考を促す課題
- ③ 思考を揺さぶる授業展開
- ④ 思考の質を見取る評価

【教科で分担して取り組むこと】

- ⑤ 教科の特性を活かして「深める」「広げる」「活かす」

以下、それぞれの取組について述べる。

① 「論理的思考モデル」を用いた表現活動

生徒の思考・判断は表現されることによって初めて評価し、指導することが可能になる。本研究では「論理的思考モデル」を用いて、生徒の表現から思考・判断の質を見取り、向上させるための指導と評価を行っている。2年次は、1年次の主張・根拠・理由付けに加えて、理由付けの中身をいくつかの〈考え方〉を用いてさらに具体化し、指導と評価に活かすことにした。（【資料4】）

指導においては、まず、教師が討論やレポートなどの言語活動の中で行われる生徒の思考・判断を予想して文章化し、指導案に示すようにした。（【資料5】）こうすることで、その授業で行われる生徒の思考・判断では根拠としてどのような情報が必要なのか、どのような〈考え方〉が予想されるのか等について予測し、課題や資料、授業展開を工夫することができると考えた。

取組①
「論理的思考モデル」
を用いた表現活動

10の〈考え方〉

◇「10の〈考え方〉」については、河野順子の「思考様式」、片桐重男の「数学的な考え方一覧」、新潟大学教育学部附属中学校や関西大学初等部の「思考スキル」等を参考に作成している。

考え方	思考のキーワード
比較	共通点は 相違点は
分類	この視点で分けると
関連	これらを関連付けると
類推	似たようなことから推測すると
一般	これらのことから
具体	例えば
多面	他の視点から
統合	まとめると
批判	本当にそう言えるのか
反証	反対の例を示すと

【資料4】 10の〈考え方〉

取ることができている。	感じられその中に「夢」が存在しているようだ。
B 2つの作品のどちらが良いのかポスターの機能に関する具体的な視点で見て、形や色彩、文字から感じ取ることができている。	○見易さから判断すると… ○新幹線の写真が使われているのでわかり易い。 ○文字の色が背景の色と比べると目立つ。 ○赤い線が背景の白に映えて見える。
【評価項目②】 印象強いのはBである。それは目立つ赤い線によるものだ。赤の線の上に白の文字があることで文字が目立っている。	B基準に未到達 ・作品の中の形や色彩、文字がどのように感じられるのか具体的な形や色彩を例に挙げ、助言をする B基準 ・コントラストの視点から作品の中の形や色彩がどのような視覚的な効果をもたらしているのか感じ取るができていない。形や色彩、文字の関連性に気付くような助言をする。
印象強さの視点、誰もが目にすることを考えると単純な形を用いて背景の白と赤の線のコントラストが印象的なBの方が良い。文字と図の関係も色だけで表現してあるBの方が文字が目立つように感じられる。 	A基準 ・コントラストの視点から作品の中の形や色彩、文字がそれぞれどのように関連して視覚的な効果を生み出しているのか感じ取ることができている。

【資料5】 生徒の思考を、表現の形で指導案に示す

取組②
思考を促す課題

特定の課題に関する
調査（論理的思考）
「6つの活動」

② 思考を促す課題

まず、「①」で予測したような生徒の思考・判断や表現を引き出すためにどのような活動を行うのかを考える。活動を考える際には、2012年2月に高校生を対象に行われた国立教育政策研究所の「特定の課題に関する調査（論理的思考）」で示された、6つの活動を参考にした。

- (i) 規則、定義、条件等を理解し適用する。
- (ii) 必要な情報を抽出し、分析する。
- (iii) 趣旨や主張を把握し、評価する。
- (iv) 事象の関係性について洞察する。
- (v) 仮説を立てて、検証する。
- (vi) 議論や論証の構造を判断する。

活動が決定したら、このような活動や思考を促すような課題を作成する。課題の作成にあたっては、次の点に留意する。

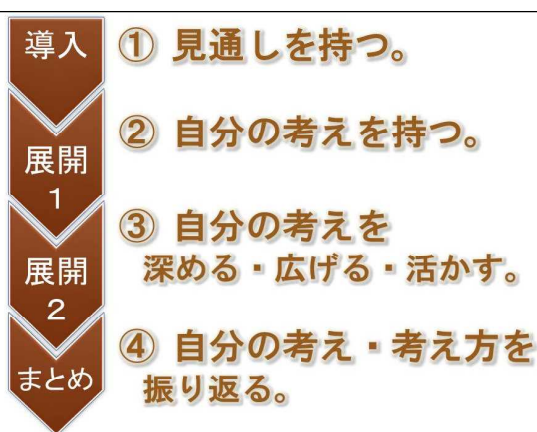
- “課題に示された情報”や“教科の知識”について、どこから、どのような情報を取り出させたいのか。
- どの「考え方」を用いさせたいのか。
- どのような結論・意見が予想されるのか。

課題づくりにあたっては、特に教師が与える情報と発見させたい情報を明確にしたり、用いる〈考え方〉が多岐にわたらないように条件設定を行うなど、用いさせたい生徒の考え方を想定しながら、考えさせたい部分に焦点化した問い方を工夫する。

取組③
思考を揺さぶる
授業展開

③ 思考を揺さぶる授業展開

思考力・判断力・表現力を育成する授業展開（あるいは単元構成）では、【資料6】のような流れを基本とする。特に重視したいのは「展開2」の部分である。「展開1」で持った自分の考えをより良くするためには、漠然と交流活動を位置付けるのではなく、教師による意図的な「ゆさぶり」によって考えを深めたり、広げたり、考えを活かして表現したりすることが必要である。教師による「ゆさぶり」には、例えば次のような方法がある。



【資料6】思考を揺さぶる授業展開

- ・ 根拠となるような新たな事実を示す。
- ・ 新たな考え方の視点を示す。
- ・ 異なる主張を示し、根拠と理由付けを予想させる。
- ・ 異なる主張・根拠・理由付けを示し、批判させる。

取組④
思考の質を見取る
評価



④ 思考の質を見取る評価

思考の質を見取るためには、思考の結果（主張）だけではなく、その結果に至る判断のプロセス（根拠、理由付けやそれらの順序）に着目する必要がある。生徒の表現からそのプロセスの質を見取るために、教師は、

「①」で予想した生徒の思考・判断に対してどのような形成的評価や総括的評価を行うのかを指導案に示しておく。（【資料7】）

教師は予想した生徒の表現と、実際に行われる生徒の表現を比較しながら形成的評価や

総括的評価を行うが、予想した表現に縛られることなく、生徒の多様な思考を見逃さないようにしたい。

取ることができている。	感じられその中に「夢」が存在しているようだ。
B 2つの作品のどちらが良いのかポスターの機能に関する具体的な視点で見て、形や色彩、文字から感じ取ることができている。	○見易さから判断すると… ○新幹線の写真が使われているのでわかり易い。 ○文字の色が背景の色と比べると目立つ。 ○赤い線が背景の白に映えて見える。
【評価項目②】  印象強いのはBである。それは目立つ赤い線によるものだ。赤の線の上に白の文字があることで文字も目立っている。  印象強さの視点、誰もが目にすることを考えると単純な形を用いて背景の白と赤の線のコントラストが印象的なBの方が良い。文字と図の関係も色だけで表現してあるBの方が文字が目立つように感じられる。	B基準に未到達 ・作品の中の形や色彩、文字がどのように感じられるのか具体的な形や色彩を例に挙げ、助言をする B基準 ・コントラストの視点から作品の中の形や色彩がどのような視覚的な効果をもたらしているのか感じ取るができていない。形や色彩、文字の関連性に気付くような助言をする。 A基準 ・コントラストの視点から作品の中の形や色彩、文字がそれぞれどのように関連して視覚的な効果を生み出しているのか感じ取ることができている。
【資料7】予想した生徒の思考をもとに、評価する。	

⑤ 教科の特性を活かして「深める」「広げる」「活かす」

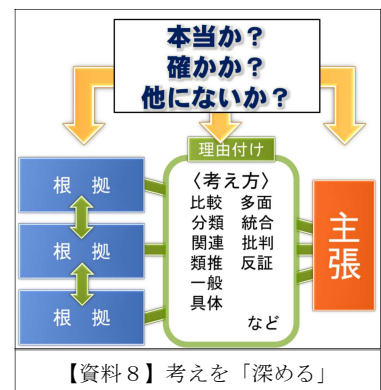
学校全体で「未来を拓く思考力・判断力・表現力」を育成するために、論理的な思考力・判断力・表現力のベースとしながら、教科の特性を活かして、考えを深めたり、広げたり、活かしたりしていくことが必要である。本年度の研究では、それぞれの教科で特に取り組むことができそうな部分を選び、教科の特性を活かした思考力・判断力・表現力の育成を行った。

取組⑤
教科の特性を活かして
「深める」「広げる」
「活かす」

(i) 考えを「深める」グループ【資料8】

このグループでは、まず、本年度の実践①で示された思考様式をもとに、「考えを深める」ための考え方とその指導・評価について研究を行う。今回は、思考・判断・表現して「正解」を導き出すことが多い教科（国語科、数学科、理科）をグループにした。

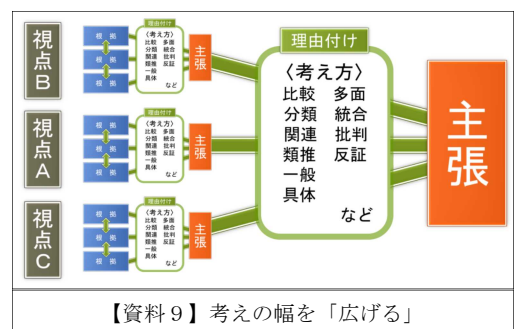
中心となる思考力・判断力・表現力は、「論理的な思考力・判断力・表現力」及び「批判的な思考力・判断力・表現力」であると考えられる。



考えを「深める」

(ii) 考えを「広げる」グループ【資料9】

このグループでは、1つの根拠や1通りの理由付けで考えるのではなく、様々な視点から考えて自分の考えの幅を広げるための考え方について研究する。今回は、複数の視点をもとに思考・判断・表現しながら「最適解」を導き出すことが多い教科（国語科、社会科、技術・家庭



考えの幅を「広げる」

科，健康教育)をグループにした。

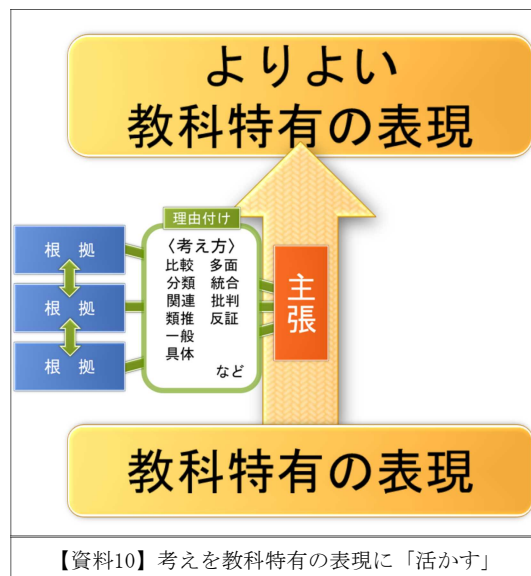
中心となる思考力・判断力・表現力は、「論理的な思考力・判断力・表現力」及び「多面的・総合的な思考力・判断力・表現力」とする。

(iii) 考えを教科特有の表現に「活かす」グループ【資料10】

このグループでは，思考・判断の結果を教科特有の表現に活かすことを目指す。教科特有の表現を高めるためのポイントを，教師主導ではなく授業の中で思考・判断・表現の場を位置づけ，生徒が導き出し，教科の目標を達成するような授業を目指す。今回は，教科特有の表現を重視する教科（国語科，英語科，音楽科，美術科，保健体育科）をグループにした。

中心となる思考力・判断力・表現力は、「論理的な思考力・判断力・表現力」である。

考えを教科特有の表現に「活かす」



4 研究のまとめ

(1) 目標実現状況の評価

目標実現状況の
評価方法

- ① 論理的な思考力・判断力・表現力について、「特定の課題に関する調査（論理的思考）」の問題を用いて調査し，分析する。
- ② 生徒アンケートを行い，自分たちの思考力の変化とその影響について調査する。
- ③ 職員アンケートを行い，生徒の思考力と各教科の授業の変化及び影響について調査する。

評価①
調査問題を用いた
評価

◇調査問題として，高校2年生を対象に行われた「特定の課題に対する調査（論理的思考）」の問題から一部を抜粋したものをを用いて，本校3年生を対象に行っている。

① 調査問題を用いた調査（2014.1実施）結果の分析より

【平均通過率（全国）】

- (i) 「規則，定義，条件等を理解し適用する」に関する問題 …78.0% (60.8%)
- (ii) 「必要な情報を抽出し，分析する」に関する問題 …… 7.2% (14.3%)
- (iii) 「趣旨や主張を把握し，評価する」に関する問題 ……83.6% (35.9%)
- (iv) 「事象の関係性について洞察する」に関する問題 ……70.1% (40.1%)
- (v) 「仮説を立てて，検証する」に関する問題 ……43.0% (34.0%)
- (vi) 「議論や論証の構造を判断する」に関する問題 ……63.5% (50.4%)

○「趣旨や主張を把握し，評価する」問題や，「事象の関係性について洞察する」問題では，特に成果が見られた。これは，生徒がテキストの主張・根拠・理由付けの構造を理解して趣旨や主張を把握することができるようになったり，事象の関係性を比較して共通点や相違点を見出すことができるようになったことによると考えられる。

評価②
生徒アンケートによる
評価

- 記述式の問題については、特に成果が見られた。これは、生徒が自分の意見の主張や根拠、理由付けなどの要素を意識しながら、必要なことを表現することに慣れていることによると考えられる。
- 「必要な情報を抽出し、分析する」問題で特に課題が見られた。これは、本当に必要な情報と必ずしも必要でない情報を批判的に分析し、とらえることができていないためであると考えられる。発達の段階によることも考えられるが、表現する際に、分析に際に用いた情報を全て用いるのではなく、相手の理解のために必要な情報を取捨選択するためには、批判的な思考力・判断力・表現力育成が必要である。

② 生徒アンケートより（抜粋）

- 問題の意味がよくわかるようになりました。（1年生）
- 今までよりも整理された（シンプルな）発言ができるようになりました。（1年生）
- 主張・根拠・理由付けを意識することで、相手の意見の曖昧な部分がわかるようになり、より細かく共通点や問題点を見つけられるようになった。（2年生）
- 社会科のディベートで、主張をした後にそれについての根拠を述べ、理由付けをしっかりと正確に言うことで、相手側も反論しにくい発表ができるようになった。（2年生）
- ニュースなどを見るときに、キャスターの意見に対して「なぜ」を考えながら聞くことができるようになった。（2年生）
- 主張・根拠・理由付けをきちんと話すことで、自分の意見を吟味することができた。（3年生）
- 人前に出る機会が多いので、自分の伝えたいことが人に伝わるように、〈考え方〉などを明確にして話すようにしている。「どんな〈考え方〉で考えてみました」という発言が増えたので、伝えたいことがすんなり理解できるようになった。（3年生）
- 英語の長文問題を解くときに、文章の構成や物語の内容をつかみながら読むことができるようになった。

評価③
教師アンケートによる
評価

③ 教師アンケートより（抜粋）

- 「主張・根拠・理由付け」や「比較・分類・関連付け」などの〈考え方〉について教師が意識しておくことで、生徒の意見が理解しやすくなった。どこが優れているのか、どこが不足しているのかがわかり、機会を逃さずに指導することができるようになった。3年生になると生徒も「比較してみると～」 「その一般化は間違っていると思うよ」などの発言をするようになってきた。（国語科）
- 課題を考える際に、どのような根拠が必要なのか、どのような理由付け〈考え方〉をさせたいのかを想定することで、授業の中身を具体的に考えることができるようになった。考えるために必要な根拠を取り出せるような資料を用意したり、既習事項を関連付けさせたりすることも、計画的にできるようになった。（社会科）
- 教科の特性をもとに3つのグループに分けたことによって、授業を検討する際に意見が出しやすくなった。他教科の授業から学ぶことが多かった。ただ、同じグループの教科の中でも少しずつ違う所があり、意外に思うこともあった。（保健体育科）

(2) 成果と課題

【成果】

- 生徒が、「主張・根拠・理由付け」だけでなく、「比較・分類・関連付け」などの〈考え方〉についても意識するようになることで、様々な事象を構造的にとらえてより深く理解したり、よりわかりやすく説得力のある表現を工夫したりすることができるようになった。
- 「主張・根拠・理由付け」を意識した表現活動を全教科で行うことにより、生徒が、1つの教科で学習した知識や技能を他教科の学習でも自覚的に活用するようになった。
- 教師が「主張・根拠・理由付け」だけでなく「比較・分類・関連付け」などの〈考え方〉についても意識することで、生徒の考えをより構造的に見取ることができるようになり、授業づくりや指導と評価が効果的に行われるようになった。
- 思考力・判断力・表現力の共通部分と各教科特有の部分に分けて考えることにより、教科の違いを越えて共通の基盤を持って授業を検討することができるようになったり、それぞれの教科の思考力・判断力・表現力の特徴やそれらを育成するための指導と評価について、再認識することができた。

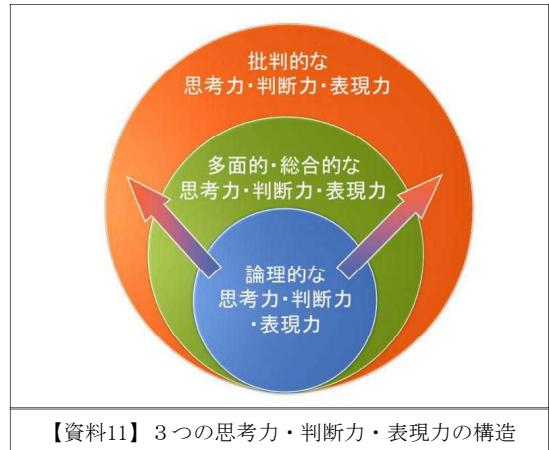
【課題】

- 生徒は、自分なりの論理（主張－根拠－理由付け）を作り上げることは得意であるが、それらが客観的に確かなのか、無駄な情報はないか等について批判的にとらえることができている生徒は少ない。批判的な思考力・判断力・表現力の育成について、その方法、適切な時期等について検討する必要がある。
- 「根拠の取り出し方」や「理由付けの仕方（〈考え方〉の用い方）」の質については、授業者の主観によるところが大きく、絶対的な基準を設けることが難しい。それぞれの場面に応じた基準を作り上げるためには、まず、授業者自身が「論理的」に考えることが必要である。
- 「主張・根拠・理由付け」や「比較・分類・関連付け」などの用語を教師だけでなく生徒も使いこなせるようにする必要がある。本研究では〈考え方〉を教え込むのではなく、教師が指導用語として用いることによって生徒の中で学習用語として広めていきたいと考えていたが、これからは、〈考え方〉をスキルとして教えるための指導の時間の設定も必要であると考えられる。
- グループの分け方については、様々な分け方が予想される。今回は、考えを深める、広げる、活かすという3つのグループで授業研究を進めたが、今後は別の観点からのグループ分けについても考え、学校全体で思考力・判断力、表現力を育成するための役割分担について検討を続けていく必要がある。
- 「未来を拓く思考力・判断力・表現力」を育成していくためには、論理的な思考力・判断力・表現力、多面的・総合的な思考力・判断力・表現力、批判的な思考力・判断力・表現力の3つの思考力・判断力・表現力の関係性を構造化し、それに基づいた中学校3年間のカリキュラムの作成が必要である。

(3) 思考力・判断力・表現力育成に関するまとめ

- ① 思考力・判断力・表現力の育成に向けた取組は、社会生活でどのような思考力・判断力・表現力が必要なのかを見据えながら行うことが重要である。本研究においては「未来を拓く思考力・判断力・表現力」がそれにあたる。
- ② 教科の枠を越えて思考力・判断力・表現力育成の授業について検討し合うには、共通のコードが必要である。本研究においては「主張・根拠・理由付け」「10の〈考え方〉」がそれにあたる。
- ③ 教科の特性による「違い」を否定的にとらえるのではなく、「違い」を生かしながら、学校全体で役割を分担して取り組むことが重要である。本研究においては、考えを「深める」「広げる」「活かす」の3つのグループがそれにあたる

- ④ 未来を拓く思考力・判断力・表現力の3つの思考力・判断力・表現力は、【資料11】のような構造になっており、全体的な指導を行いつつ、1学年では「論理的な思考力・判断力・表現力」、2学年では「多面的・総合的な思考力・判断力・表現力」、3学年では「批判的な思考力・判断力・表現力」に焦点化して育成すると効果的であると考えられる。



【資料11】 3つの思考力・判断力・表現力の構造

〈主な参考文献〉

文部科学省：「中学校学習指導要領」，2008 「言語活動の充実に関する実践事例集【中学校版】」，2011
国立教育政策研究所：「評価基準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」，2011 「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕」，2012 「特定の課題に関する調査（論理的な思考）調査結果」，2013 「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」，2013
井上尚美：『言語論理教育入門』，明治図書，1989
片桐重男：『数学的な考え方の具体化と指導—算数・数学科の真の学力向上を目指して—』，明治図書，2004
関西大学初等部：『関大初等部式思考力育成法』，さくら社，2012
新潟大学教育学部附属中学校：『この“思考スキル”で高める思考力・判断力・表現力』，明治図書，2012
河野順子・熊本大学教育学部附属小学校：『言語活動を支える論理的思考力・表現力の育成—各教科の言語活動に「根拠」「理由づけ」「主張」の三点セットを用いた学習指導の提案』，溪水社，2013